

万葉の川心

山背にして作れる歌

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

(巻第七 一一三五番歌)

宇治川は 淀瀬なからし 網代人
舟呼ばふ声 をちこち聞ゆ

春はあけぼの。白々と明ける空を眺めながら、小気味よく朝の街をランニングする・・・という生活に憧れながら、現実、なかなか早朝の景色を眺める余裕がない。新しい部署、新しい立場、新しい周りの人々。早く慣れなければとつい焦ってしまう。自分は人からどう見えるかなんてことに、結構気をつかう。新人の彼に、声をかけようとするのだが、幾つになっても古巣にいるこちらまで緊張するのだから不思議だ。しつくりくるまでには時間がかかる。相手のことを思えば思うほど、どう声をかけたら良いか分からなくなる。案外、何にも気にされてないことの方が多いのに、見栄とというのは果てしないものだと思う。

挨拶上手の友達が言う。「初めから頑張らない方が、後から評価があるんだよ。」長女のせいか性格か、「世渡り」は、からきしだめだ。知らぬ間に全力投球して、くたくたになる。助けてとか、手伝ってとか、出来ないのでも相談しますとかが言えない。一生懸命だけではだめだ。先を読んで、気を配って、上手くスタートしたいと思いつ過ぎて空回りする。もうちょっとと気楽にできたら相手も楽なのにも思いながら・・・気がつく、マッサージのパンフレットをしげしげと見つめている。癒しグッズに走る前に、ほんの少し自分の何かを変えてみたいと思う。春になるといつも新しい自分になりたく

なる。よし、決めた、まずは掃除しよう。古い物をみんな整理して、自分の中を空っぽにしよう。年度末にできなかったことから始めようと心に決め、引き出しを開けた。

宇治川には、流れのゆるやかな瀬はないらしい。竹や木の網を張って漁をする網代人の舟を呼び交わす声、あちこちから響くことだ。川の流れを横切って杭を並べ立て、杭の間を竹や木で細かく編んで魚を通れなくする。その一部分を開けて、簀を水面に平らに置く。簀の上で、魚がはねる。漁師は声を掛け合い、舟を呼び、手際よく漁を進めていく。川の流れも、天候も、川にいる魚の様子も、昨年と同じものは何も無い。川に通い、流れと対話し、漁をする。積み重ねてきた経験と、研ぎ澄ませた感と、誇り、引き継がれる技。淀んだ瀬を求め掛け合う声は、川の流れの音に合わせて気持ちよく響いたと思われる。歌碑は、宇治の朝霧橋東詰の川岸にある。歌碑の前で川の流れを見つめていると、万葉と今が交差して、時の流れまでがゆるやかにっていく。

さて、すっきりきれいに片付いた。まず、お茶を入れた。「ありがたうございます。おいしい。」と、新人の元気な声が帰ってきた。たくさん伝えたいことがある。たくさん聞きたいことがある。けれど、まず、自分をすっきりさせることから始めよう。急がば回れ。声をかけ合い、一休み、ひとやすみ。それで、案外うまくいくのかもしれないと、がんばりマシンの自分に、おいしいお茶が教えてくれた。新しい皆さん、これからよろしく。

